

## はじめに

---

慶應義塾大学病院での研修と、東海大学医学部付属病院での麻酔科の研修を終え、外科医としてスタートを切ることに期待していました。外科医というものがどういふものなのか、このときは知る由もありませんでした。

研究室に閉じこもって研究する性分ではありませんでしたので、体と頭を使う外科医が自分には向いていると思いました。

大学時代の実習病院で消化器外科の実習をたくさんさせてもらい、外科そのものの魅力はありましたが、病気で亡くなってしまう患者が多かったので、なんのためのオペかな、とは思いました。

産婦人科はオペと研究ができる理想的な科と思いましたが、実習で単調な仕事の繰り返しという印象を持ってしまったことと、オペの種類が限られている、と感じたために産婦人科はあきらめました。

整形外科のオペは、消化器外科のような繊細な技術はあまり必要とされませんが、患者が元気になるまで治るということにやり甲斐があると思えました。実際、整形外科で死亡診断書を書いたことはほとんどありませんでした。

最初に勤務した佐野厚生総合病院は救急病院だったので、整形外科ばかりではなく、一般外科や脳外科など、非常に多くの症例を経験しました。

外傷が多かったので、外傷の治療の勉強になりました。

昭和55年に開通した東北自動車道の基幹病院のひとつになっていましたので、交通事故による重傷の患者が多く運ばれてきました。

一度にふたり以上の患者が運ばれてきたこともあり、救急治療室が戦場のようになりました。

次の国立療養所村山病院（現・国立病院機構村山医療センター）では大谷先生や柴崎先生などの優れた指導者に恵まれ、この病院で脊椎外科のスペシャリストになりました。この病院で博士号を取得しました。

綱本さん親子と知り合ったのはこの病院でした。

柴崎先生には多くの脊椎のオペを教えていただき、その後の脊椎のオペには計り知れないほど役に立ちました。

その次の病院が公立福生<sup>ふっさ</sup>病院で隣に米軍横田基地があり、多くのアメリカ人と知り合いになりました。とくに、エンジニアのマイクさんには英会話の勉強も教わり、家族ぐるみでお付き合いしました。

多くのアメリカ人の家によく遊びに行きました。ただ、離婚と再婚を繰り返すので、行くたびに奥さんが違っていったアメリカ人もいました。

公立福生病院は居心地のいい病院でしたが、整形外科の医者が3人しかいなくて、しかもひとりには研修医だったので私がほとんどの仕事を任せられました。

勤務医として最後の病院が防衛医科大学校病院で、ここでの4年間で最も充実した時期でした。

防衛医科大学校の卒業生は非常に優秀だったために、私の仕事はオペと週に1回の外来しかありませんでした。

東京大学医学部と慶應義塾大学医学部の間で熾烈な教授戦が行われていました。

東京大学と慶應義塾大学で教授の数が9・9で同数だったために、次の整形外科の教授戦で慶應義塾大学が勝れば教授の数が10・8となり、病院長をはじめとしてすべての要職が慶應義塾大学になるので、東京大学と慶應義塾大学の双方にとって絶対に負けない教授戦でした。

その熾烈さは山崎豊子さんの『白い巨塔』の教授戦をはるかに凌いでいました。

整形外科の教授は大阪大学の下山先生であり、大阪大学は東京大学系列だったために、准教授の新明先生、講師の山口先生、そして私を疎んじていました。

防衛医科大学校病院勤務中に埼玉県の個人病院に頼まれてオペに行きました。

個人病院によつては1日に3人の脊椎のオペを行ったこともありました。

オペの助手に医者をつけてもらえないことが困りましたが、個人病院の看護師はだいたいが優秀でしたので、オペがやりにくいことはありませんでした。

脊椎腫瘍のような大きなオペのときは防衛医科大学校病院から後輩を連れていきました。

勤務医時代はオペばかりして、3000人以上のオペをしました。運よくミスをしたことは一度もありませんでした。

書籍に出てきますお名前はすべて仮名にしています。